

平成30年度 障害学生支援専門 テーマ別セミナー

初等中等段階から大学等への移行
(進学)について

ろう学校の立場から
東京都立立川ろう学校 村野一臣

セミナーの目的

- 平成29年3月に文部科学省でとりまとめられた「障害のある学生の修学支援に関する検討会（第二次まとめ）」で、大学・短期大学・高等専門学校（以下「大学等」という。）が取り組むべき課題として、高等学校や特別支援学校高等部（以下、「高校等」という。）に在籍する障害のある生徒が大学進学を希望するに当たり、これらの学校で提供されてきた支援内容・方法を円滑に大学等へ引き継げるように留意し、これらの学校に対して大学等から支援体制や制度、取組について情報発信を強化していくことが重要であるとされています。
- そのため、高校等、大学等の両関係者が参加できるセミナーを開催し、支援体制の向上に関する情報や意見の交換を実施して、大学等でそれらの取組を進められるよう、障害学生支援の充実を図ります。

セミナーの内容

- ・障害のある生徒の個別の教育支援計画等の高等教育機関への引継ぎと課題や、発達障害のある生徒への学生支援の連携と課題について

分科会での話題提供のプロット

- 本校の概要 高等部の進路指導
- ろう学校高等部大学等進学者の概要
- 志望校を選ぶまでの流れ
- 大学等への情報提供の現状
- 情報保障から見た進学先選びの現状
- 卒業生の事例
- 大学進学への課題と成果(全聾長)
- サポートの構成要素
- まとめ



本校の概要



東京都立立川ろう学校:

幼稚部から高等部までの総合学園

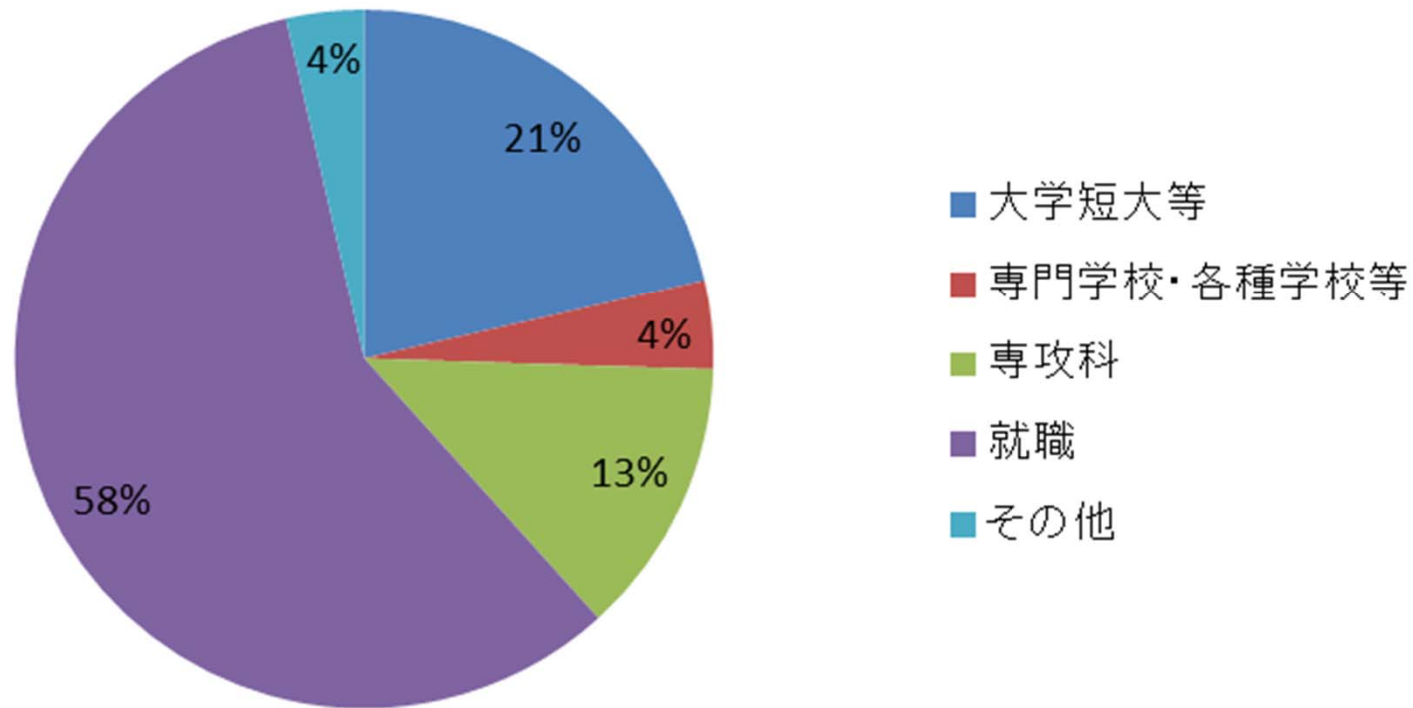
学部	学級数	幼児・児童 生徒数
幼稚部	6	26
小学部	14	54
中学部	8	35
高等部普通科	11	61
専攻科	2	6
合 計	41	182

高等部の進路指導 (大学進学者・企業就職者の概要)

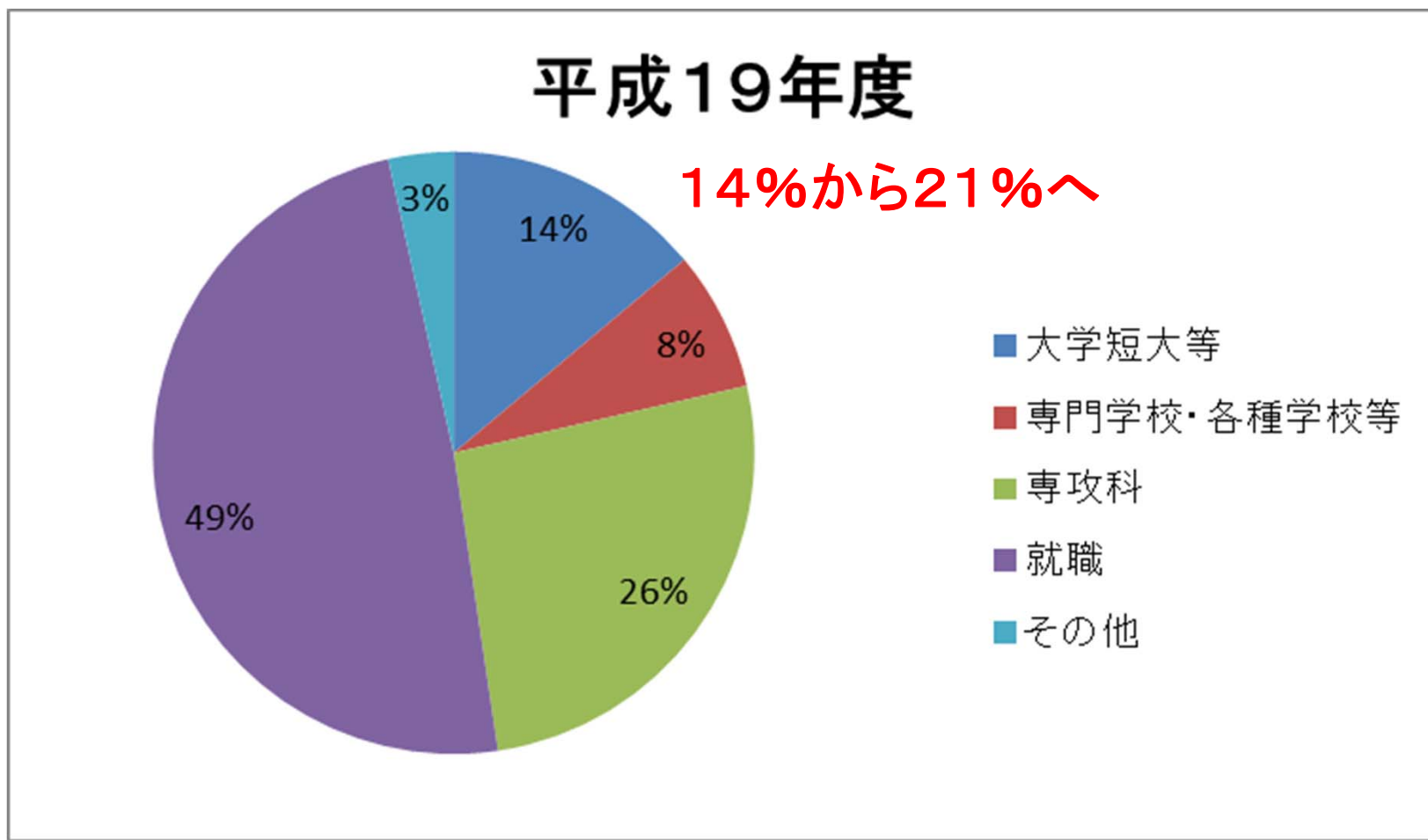
年度	卒業生数	大学等への進学者数と 卒業生数に占める割合		企業への就職者 数
29年度	18名	5名	27%	4名
28年度	24名	8名	33%	6名
27年度	19名	5名	26%	4名
26年度	18名	3名	33%	1名
25年度	11名	なし		2名
24年度	17名	3名	17%	2名

ろう学校高等部3年生の進路調査 (全国聾学校長会調査)

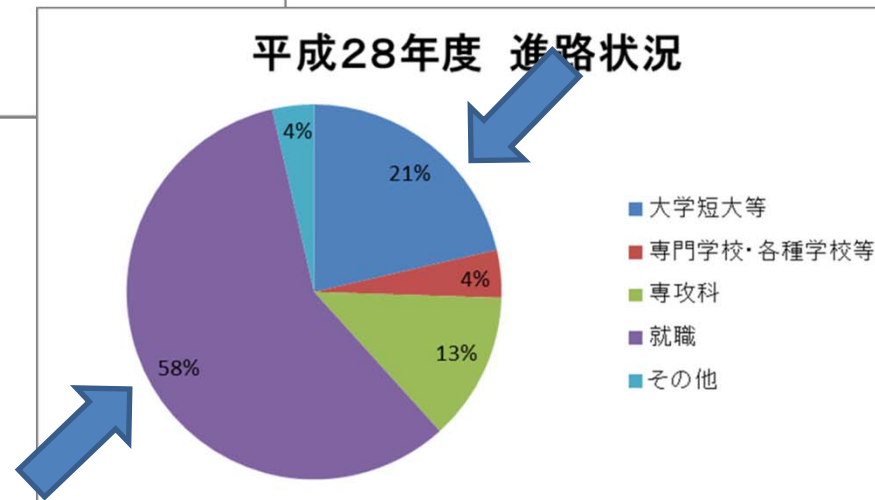
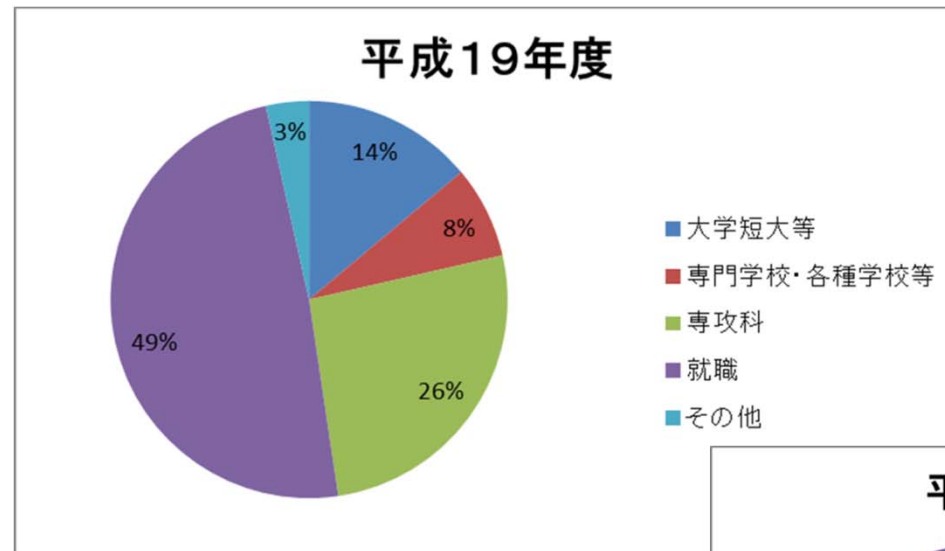
平成28年度 進路状況



大学進学が10年で増加

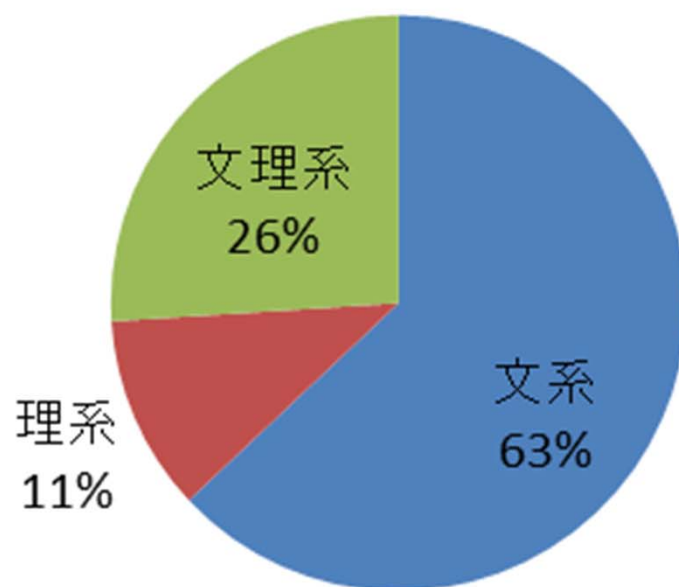


大学等進学、就職の増加 専攻科、専門学校等の減少

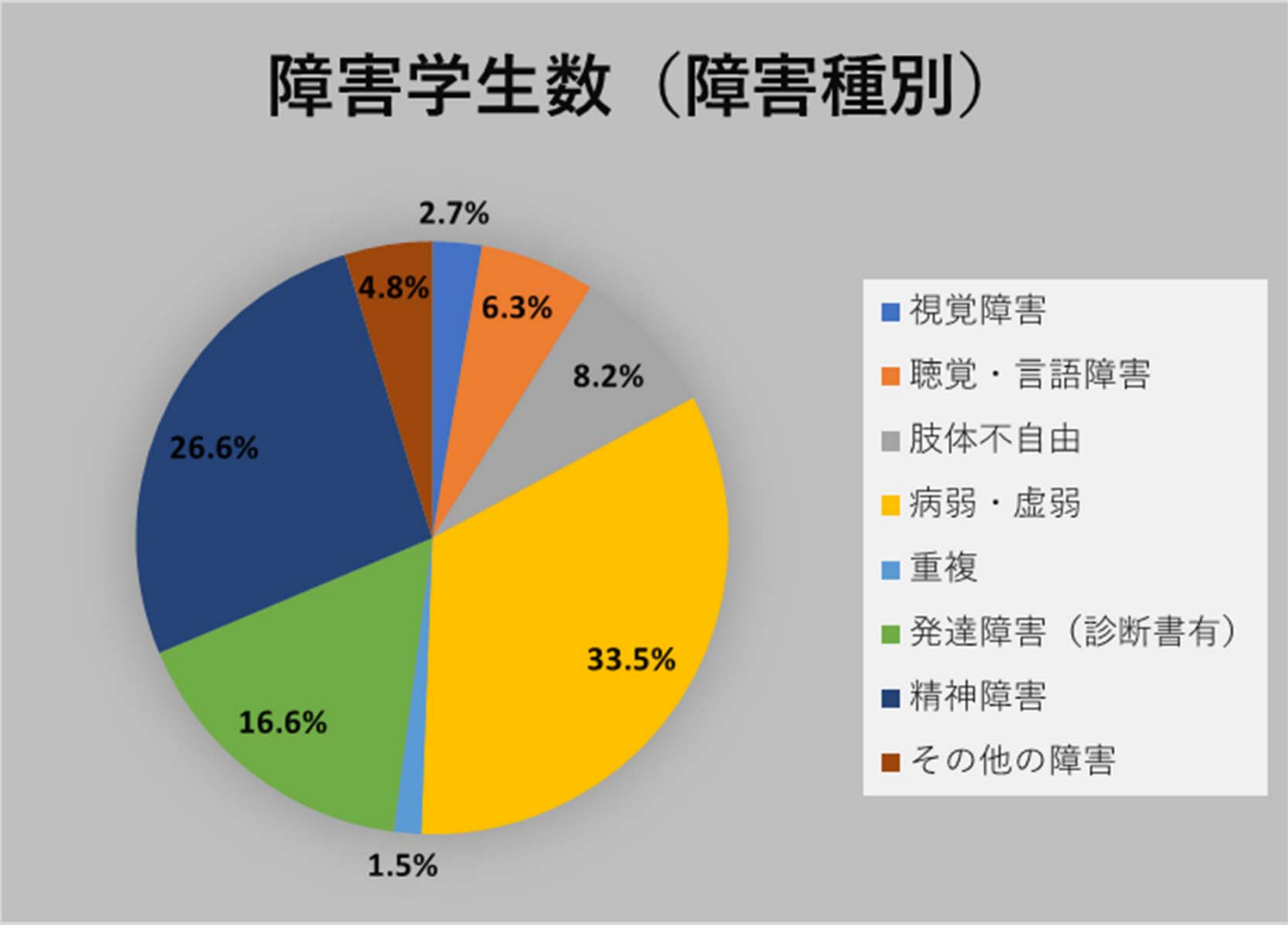


平成28年度卒業生

文理系の割合 (筑波技術大学除く)



平成29年度(2017年度)障害のある学生の 修学支援に関する実態調査(JASSO)



平成29年度
(2017年度)障害のある学生
の修学支援に
関する実態調
査(JASSO)

視覚障害	831
聴覚・言語障害	1951
肢体不自由	2555
病弱・虚弱	10443
重複	462
発達障害（診断書有）	5174
精神障害	8289
その他の障害	1499

大学(志望校)を選んだ理由

- 学びたい学科がある
- 自分の学力に見合っている
- 自分が必要とする情報保障がある



「情報保障がある大学」から志望校を
絞り込む傾向が強い

志望校を選ぶまでの流れ 情報の収集・提供・共有

1. 「何を」「どう」伝え合うのか

(1) 本人と保護者が志望校に 出願前

- ① オープンキャンパスに参加
- ② 個別相談や担当者と
- ③ 自分の状況を知ってもらう
- ④ 大学の情報保障について確認する
- ⑤ 授業体験を行う場合もある

志望校を選ぶまでの流れ 情報の収集・提供・共有

(2) 在籍校から志望校へが

出願前に、本人、保護者と情報を共有しながら
出願・受験に必要な手続を進める

入試当日の対応について情報提供と共有

- ① 出願書類の確認
試験等における障害への配慮事項に
関する申請
- ② 座席の配慮
- ③ 情報保障の有無と程度
- ④ 手話通訳の同席と派遣の依頼 等

志望校を選ぶまでの流れ 情報の収集・提供・共有

(3) 入試後～入学前

入学後の生活について

①大学が面談・相談の場を設けることがある

②発達障害を併せ有する(もしくはその傾向がある)生徒の場合

在籍校から大学入試課等と本人の障害特性について情報を共有することがある

大学等への情報提供

- 個別の教育支援計画、個別の移行支援計画による情報提供の実際



本校(聴覚障害生徒)においては

具体的に内容について提出や情報を

求められるケースは少ない

⇒主に具体的な支援について情報交換

大学等への情報提供

聴覚障害のある学生を受け入れるにあたり、大学が個別の教育支援計画や個別の移行支援計画を活用した(したい)ケースはあるのか...?

聴覚障害の方が求める支援

= 単発的・場面限定的

困る場面で支援を受ける

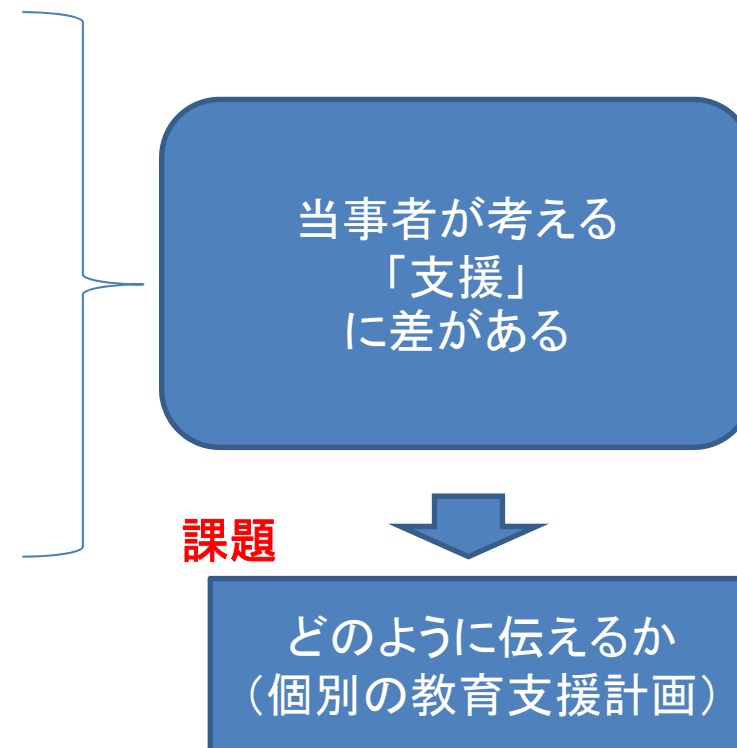
身体障害の方が求める支援

= 常時・連続的

常に支援が必要

生活の中で支援が

途切れることがない



情報保障の視点から見た 進学先選び

- ・障害のある学生を支援する部署がある
- ・部署はないものの、個別に対応(コーディネート)している
- ・実践例はないが、受け入れるにあたり前向きにとらえてくれる



=情報保障がある、受けられる安心感があると、
より志望校への受験意欲が高まる(障壁が低くなる)

「情報保障する体制が整っていないので…」

「聴覚障害の方を受け入れたことがないので…」等々

=自分に見合った情報保障がない(満たされない)説明を受けることで、
志望先を再考するケースもある

情報保障の視点から見た 進学先選び

- ・障害のある学生を支援する部署がある
- ・部署はないものの、個別に対応(コーディネート)している
- ・実践例はないが、受け入れるにあたり前向きにとらえてくれる



＝情報保障がある、受けられる安心感

例「手話通訳、ノートテイク、モバイルしか提供できませんので、授業、式典以外の場面では、なかなか対応できません。」

⇒できる条件を考えて、より志望校への受験意欲が高まる
(大学選びの障壁が低くなる)

情報保障の視点から見た 進学先選び

情報保障する体制が整っていないので・・・」
「聴覚障害の方を受け入れたことがないので・・・」
等々

大学側の説明から

『自分に見合った情報保障がない(満たされない)』

と判断



志望を断念へ

卒業生の事例

【本人の状況】

四年制大学

【選んだ理由】

- 学びたい学科があった
- 過去に先輩が通っていた
- 障がいのある学生に対する理解がある大学で、聴覚障害学生が毎年在籍していた。
- 本人の望む情報保障があった
⇒ノートテイク、手話通訳士の派遣、
映像教材の文字起こし ※回数等は上限あり

卒業生の事例

- 大学に障害学生を支援する部署がある
- 情報保障については、すべてのニーズに応えきれていない、とは大学は認識している
〈現状〉聴覚学生の在籍数と情報保障を担う学生の登録者数、登録者の授業予定などから、すべてのニーズに応えきれていない
- 社会参加を考えると、自分から友人等に働きかけなどして課題を解決する力も身に付けてほしい、という考えもある

卒業生の事例

- 講師の声を聞き取りやすい席を自主的に確保
- 大学の支援をすべては活用していない

(理由)

⇒ 今ある支援が必要な時に活用できるとは限らない

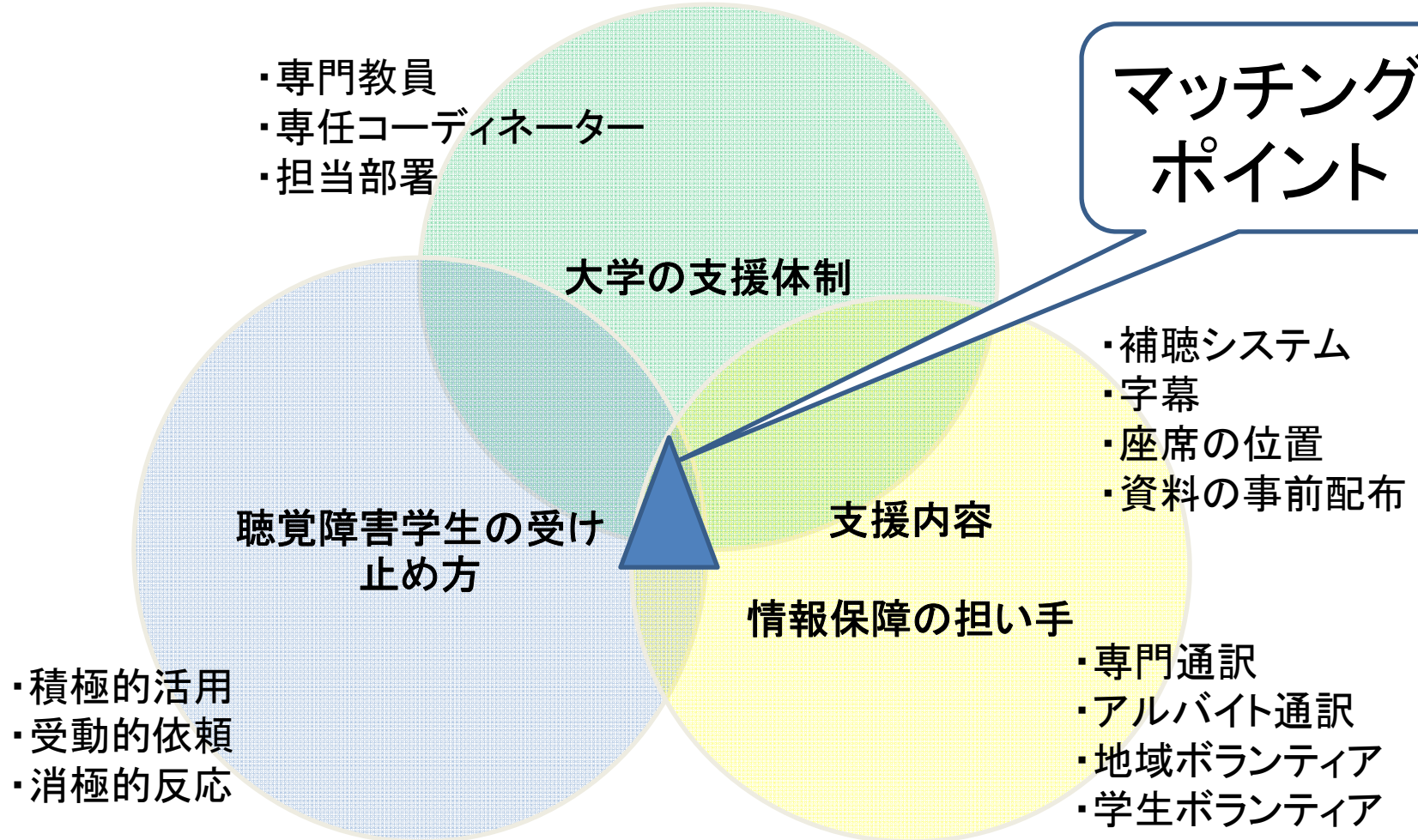
⇒ 友達に依頼する方がやりやすい面もある

⇒ 自分で何とかしないといけないと思っている

支援内容(合理的配慮)

- 情報保障者の配置(ノートテイク、パソコンノートテイク、手話通訳等)
- 補聴援助システムの利用(ノイズ軽減イヤホン等を含む)
- 資料の事前配付
- 授業内容の録音許可
- 座席位置の配慮
- 視聴覚教材への字幕挿入
- リスニング等、聴覚を用いる授業に対する代替措置

サポートする構成要素



出典：関東聴覚障害者学生サポートセンター吉川あゆみ氏の資料を基に作成

大学進学への課題・成果

(全国聾学校長会)

- 各大学の情報保障についての情報が全国規模であるとありがたい
- 大学進学後のアフターケアについて、どこまで学校として行っていくべきか検討が必要
- 情報保障のできる大学の開拓、支援が大切である
- 大学での体験授業が生徒の理解につながり効果的である
- 大学卒業後の就職の状況把握及び支援体制

大学入学共通テストについて

- 英語「スピーキング」の対応
 - 英語4技能に係る民間試験導入への対応
 - 検定業者の対応
 - 各大学の判断
- (例) 聴覚障害者への配慮として、リスニング、スピーキングを免除している検定もある。

まとめ

- 高大連携：支援体制（情報保障、相談等）、本人の意識、学校のアフターフォロー、支援者の確保（理解啓発、関係機関との連携、機器の活用等）
- 個のニーズに応じた継続した相談（本人・保護者・大学等との共通理解、個別の教育支援計画の活用）
- 情報発信（具体的事例の紹介）

現役大学生からのメッセージ

- コミュニケーション能力が必要。障害の有無に関わらず、自分の欠点を知り、自分も含めて認めてあげることから始めます。
- 自分に自信をもっても、出来ないことは出来ないということが起こります。出来ないことをしっかり誰かに伝える勇気です。
- 出来ないので代わりに何かの課題にしてくれませんかなど自分でできることを提案することが大切です。

サポートする構成要素

発達障害学生

- ・専門教員
- ・専任コーディネーター
- ・担当部署

マッチング
ポイント

障害の自己理解

- ・手帳がある
- ・手帳がない
- ・支援の意向がない



支援の差

- ・積極的活用
- ・受動的依頼
- ・消極的反応

大学の支援体制

発達障害学生の受け止め方

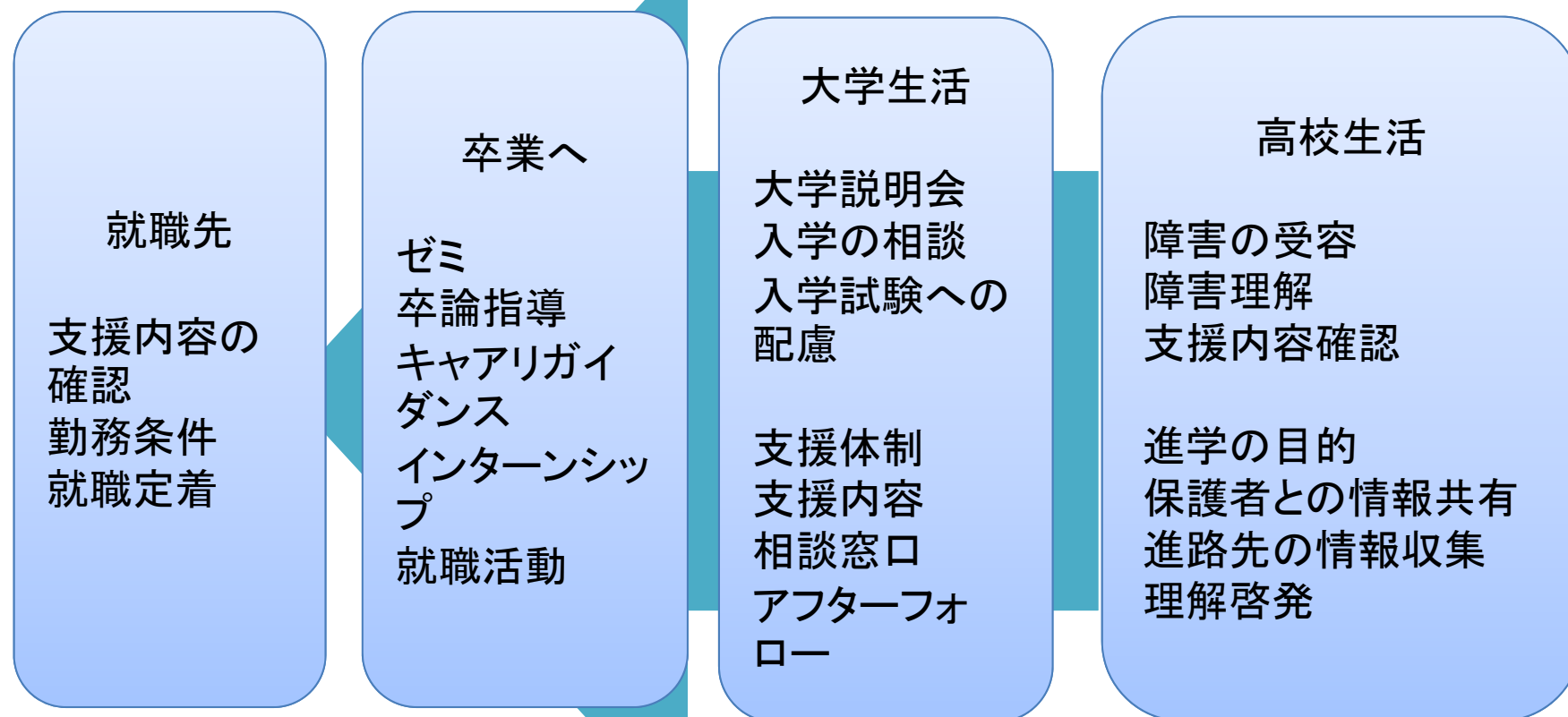
支援内容

- ・授業における支援
(環境の調整等)
- ・授業以外の支援
(カウンセリング等)

具体的な引き継ぎと支援が重要

高大 社会自立までの支援

本人を中心とする支援体制の構築



個別の教育支援計画の活用